

○教員を目指そうと思ったきっかけについて

（参加者）小学校6年生のときの担任の先生に憧れていた。小学校から浜松で育ったので、大学も浜松の大学に進学した。教育実習の際、先生方や子供たちが優しく、目指すことにした。

（教育長）どういうところに憧れたのか。

（参加者）関わっていただいた先生方が優しくかった。小学校6年生のときは、厳しく感じたが、今になって考えると、将来のことを思って厳しいことを言ってくださっていた。厳しさの中に愛情があった先生だと思う。優しいだけではなくて、子供たちの将来のことを考えてくれたことに感謝している。

（教育長）情熱と愛情を持った、目指すべき教職員の姿である。

（参加者）私も憧れた先生がいた。欠席したときには、毎回のように家に来て、授業のことを教えてくれた。そういう愛情を受けて、自分も目指したいと思い始めた。勉強に励み、大学も入ることになり、教員を目指そうという気持ちが強くなった。

（参加者）小中学生のときに、友人に勉強を教える機会が多かった。教えることが楽しいと思ったり、その友人が「わかったよ。」「テストでいい点数取れたよ。」と言ってくれるのが嬉しかったりした。教育学部で勉強していくと、勉強を教えるだけではないということも学んだ。実際に教育実習では、子供たちの成長を間近に感じ、自分が生徒だったときには見えなかった教員の姿まで見られた。教員のやりがいや魅力を感じ、教職を目指したいと思った。

（参加者）私も小学校のときの出会いがきっかけで、教員になりたいと思った。小学校6年生のときの担任の先生のおかげで、小学校はすごく楽しいところだと気付いた。私も、学校は楽しいところだと気付かせることができるような教員になりたいと思ったのが最初のきっかけである。

（参加者）私も、小学校のときに先生にとっても憧れを感じた。自分自身の良いところをさらに伸ばし、自信をつけることができた。私も子供に自信をつけるような教員になりたいと思った。

（参加者）私は、不登校やいじめなどの教育問題と向き合いたいと思い、教員を目指した。浜松市では校外適応指導教室があり、その普及率が高いことに関心を持った。

浜松ならば、不登校の問題などの支援に向けて活動ができるのではないかと思います、浜松市で教員を目指した。

（参加者）社会科教員を目指している理由が2つある。1つ目として、社会という教科が好きで興味関心が高いこと。2つ目として、高校のときの先生が、難しい政治や経済の仕組みをわかりやすく説明し、興味を持たせてくれたことに感銘を受けて、社会科教員を目指したいと思うようになった。

（参加者）初めて教員になりたいと思ったのは中学校2年生のときで、将来の夢について考える機会があり、そのときに勉強を教えることが楽しいと思った。高校入学後、友人に教える機会があり、「すごくわかりやすかった。」と言われたことが嬉しかった。大学への進路決定の際、先生がサポートをしてくれた。このように、生徒たちの進路や悩みに寄り添って成長に携わることは魅力的なことで、教育実習を通して実感して、教員になりたいと感じた。

（参加者）幼少の頃からバスケットボールに取り組んできた。大学進学の際にこれからの進路を考えた。ミニバスを子供たちに教えることが好きだということに気付き、保護者や監督からも向いているのではと言ってもらい、自信になった。この経験を生かして、自分も教員になろうと思った。

○心配や大変だと感じるようなことを乗り越えてでも教員になりたいと思う理由について

（参加者）教育実習では、朝が早く夜が遅いことを覚悟して、教育実習に臨んだ。隣のクラスの先生と相談ができないようなイメージがあった。実習先は、6学年とも単学級であった。職員室の先生方が温かくて、学校全体で子供たち全員を見ているというような雰囲気があった。実習先の用務員や地域の方とは、今でも地域で会うと話しかけてくださる。一人ではないと思うと、家族のような感じがして居心地が良かった。

（教育長）組織で対応することは、今の時代は浜松に限らず、他地域の学校もこのような形で行っている。まさに言われた通りと思う。

（参加者）まわりから、「教員はやめた方がいいよ。」「正直、厳しいよ。」と言われたことはある。しかしながら、今の時代は、どの職種でもそうだろうと思う。それならば、楽しいと思ったことを全力でやろうと思っている。自分は教員になりたい、絶対に楽しいと思って、今は行動している。

（教育長）ぜひ、その主体性というものを続けていただきたい。

（参加者）１日５時間の授業を毎日やるのはとても大変だと思っていた。教育実習で本来なら５時に帰れると言われていたが、そこから７時まで残っている状態だった。しかし、頑張ったら頑張った分だけ子供がとても喜んでくれる。「今日の授業はよかった。」と言われたのがすごく嬉しかったので、実習を通して、より教員になりたいという思いになった。

（教育長）先生方は、周りから褒められたり、認められたりすると、やる気が湧いてくる。それは、教員という仕事の魅力である。また、働き方改革の観点から勤務時間は考えていきたい。

（参加者）私はまだ大学３年生で教育実習は行っていないが、ボランティアで不登校の子供たちの支援をしている。子供たちは、自主的に関わろうとしてくれる。前向きに声掛けをしてくれる。私はそこにやりがいを感じているので、このような思いを持ち続けたいと考えている。

（教育長）個に応じた指導、発達支援教育を以前から浜松市では行っている。校外適応指導教室、浜松市では「まなびの教室」というが、徐々に増やしている。

（田中委員）教育長が話したことと関連するが、教職に就くことに対してどれくらいの否定的な意見があるのか。また、家族を含めた応援や後押しがどれくらいあるのか。否定的な声がありながらも、自分は目指したいという方が多いのでしょうか。ただ、周囲から言われるほど、ブラックではないと思う。働き方改革の中で、ICT等を取り入れ、自分の業務以外のものを効率よく進めている。また、外部からの支援を借りながら自分の業務に専念できるようにしている。皆さんが思うような不安は少しずつ解消されてきていると感じている。

## ○浜松の教育あるいは学校に期待していることについて

（参加者）教育実習先は、家族のような雰囲気のある学校であった。私は、来年度から浜松市の教員になる。どこの学校に配属されるかわからないが、どこの学校も同じような雰囲気であることを期待している。

（参加者）私は、浜松のことはあまり知らないが、今日、実際に浜松の教育の話をして、そこから決めればいいのかと思っています。できるならば、子供が困っていることや、悩みを解決できればいいというのが一番であり、子供との交流ができる場が増えればと願っている。

（教育長）先ほど伝えた ICT や人的な課題を毎年、改善している。他の市町と比較すると環境整備はできている。そういった意識で取り組んでいる。ぜひ、期待をしてい

ただきたい。

（参加者）教育実習に行ったときに、発達支援学級が5学級あり、数の多さに驚いた。私が小中学生のときは、大体一つの学校に1～2学級程度だった。今は多くの学級が設置されて、1クラス当たり4～5人という少人数であった。一人一人に対する支援が手厚いと思った。それを全校の先生方が子供たちの実態を把握して、先生同士で連携して、その日に起きたことを報告していた。そこは浜松の学校のいいところだと思い、これからも期待できる場所だと感じた。

（教育長）発達支援学級は浜松に限らず、他の市町も増えていると思う。浜松市では、1つ目として、1クラス当たりの生徒数を少ない基準にして学級を増やしている。2つ目として、支援員、サポートする教員が、浜松は他の市町に比べると多いのではないと思う。これらが、浜松市が他の市町よりも優れていると私たちは自負している。

（田中委員）教育実習先で学んだ人もいるかもしれないが、事情があって学校に登校できない子供とオンラインで授業を行うこともある。

（参加者）浜松市に外国人の方が多くいることを研究で調べている。小中学校に通う外国籍の子供が増えてきている。教育実習先で、日本語の指導がないため授業に残されている子供がいた。何か支援ができないかと感じた。

（教育長）外国籍の児童生徒に対する環境について、充実はしてきたが、まだまだ十分ではないと思う。例えば中学校から外国から来て、日本語があまりよくわからない子供には、中学生のための日本語初期指導を2か所で10週間かけて学ぶということが浜松市独自の制度としてある。これを担当する教員について、文科省に加配を要請して配置している。できる限り、優先的に支援員を配置しようと考えている。また、翻訳機械を配付して利活用を進めていく。

（参加者）私は小学生の頃から障害のある方や外国にルーツのある人と関わる経験をするのがとても大事だと思う。私は在校生の30%ぐらいを外国にルーツのある子供が占める学校で育った。特別支援学校との交流も年に1、2回あったので、障害や外国に対しての偏見はなかった。小さい頃に理解を深めることで、壁や偏見がなくなると思う。交流の場を設けることが大切と考える。

（教育長）浜松は多文化共生のための教育を進めている。

（参加者）私も育ってきた環境の中で、いろんな文化の体験ができて、いい経験になったと思う。

（教育長）分けてしまうと多文化共生の良さがなくなる。お互いが困ったときにフォローする人や場所を用意しようと考えている。

（参加者）教育施策を共有して理解することや情報の伝達ができると、より良くなると考える。

（教育長）まさに「報連相」や「組織で対応」は、今の教育現場では大切である。ICTを活用して、情報が止まってしまうことを防がなければならない。状況によっては、教育委員会にも同時に情報が入るようなシステムを構築しつつある。完成しているものもある。

（参加者）浜松の教育は、個を伸ばす教育や、思いやりを持てるような教育、インクルーシブ教育の実現につながりやすいと思う。日本語支援に関して、拠点校指導員を各校に配置できる体制を実現してほしい。また、静岡県がソーシャルエモーショナルラーニングという豊かな感情を育成する教育を進めている。この導入についても期待している。

（教育長）１点目の拠点校指導員の配置はそこまで行き届いていないが、特定の拠点校から巡回するようにしていく。２点目について、来年度から第４次浜松市教育総合計画では多様性はコンセプトの一つである。また来年度以降もキャリア教育を進めていく。浜松市で育った子供たちは、力強い社会人になって生きていくことを期待しているところである。

（参加者）教育実習先で、通常学級にいるが少し支援が必要な生徒がいた。職員室では生徒の情報共有が細目にできていた。誰一人取り残さないためには学校全体としてサポートしていくことをこれからの教育に期待している。

（教育長）浜松に限らず、どこの市町もこのような形で進めている。皆さんが教員になったときは、一人で抱え込まず、周りに情報を共有することが大切であると思う。ただ、うっかりすることもあるので、ICTも活用しながら明確に伝えることも大切である。

（参加者）私が浜松を選んだ理由は、「目指す子供の姿」が、私が子供たちに伝えたいことと重なったことがとても大きい。子供自身が考えないと成長できず、他人に言われて選んだものはやはり後悔しかなく、他人のせいにして逃げることができてしまう。そう思ったときに、この目指す子供の姿が浜松市で自分の考えと似ていると感じた。どうやって先生方が実践してきたのか、自分も学んでいきたい。

（教育長）第３次浜松市教育総合計画から第４次浜松市教育総合計画になっても、そ

の根底は変わらない。若干、文言が変わっている部分はあるが、本筋は変わっていないので、浜松でそれぞれ実践してほしい。期待している。

○迷っていることや疑問に思うことについて

（参加者）個に対応する指導や支援と、集団的な対応のつながりや連携はどうしているのか。

（教育長）以前は、一斉指導が多く、個に応じた対応はなかなかできなかった。全て個に応じるのではなく、授業や子供の実態によっても異なる。配慮を要する子供には個に応じた対応を基本としている。一般的には主体性を重視していく。子供たちに任せる中で進めていくような教育をこれからやっていく。受身ばかりの子供を育ててしまうと社会に出たときに通用しない。子供自身が主体的に自分のこととして行動できる子供たちを育てていきたい。教員になって場面ごとで迷うときには、ベテランの先生方、同僚の先生に聞きながら子供を導いてほしい。

（参加者）ありがとうございます。

（中林担当課長）私が心掛けていたことは、友達同士がお互いを大切にすることであった。子供たちが解決しようとする力を信じることや、子供たちのつながりや支え合いを集団の中で築き、関わり合いの中で学習集団を作っていた。

○学級担任になったらどんな学級にしたいか

（参加者）「また来たくなる学級」にしたい。学校は友達がいて楽しむことを意識したい。

（参加者）自分のことや相手のことを考えられるようにしたい。また、人とのつながりを大切に話しやすい学級にしたい。

（参加者）わからないことや悩みを相談しやすい学級にしたい。

（参加者）一人一人が居場所を感じられる学級を作りたい。子供たちの間で居場所があることを示しあえる学級を作りたい。

（参加者）私はお互いが認められるクラスを作りたい。個についてしっかり理解を深めて、みんなで高め合えるクラスにしていきたい。

（参加者）何にでも挑戦できるようなクラスを作っていきたい。間違いや失敗して落

ち込むこともあるが、何にでも挑戦してほしい。もし困ったときは先生が助けるという姿勢でいたい。

（参加者）みんなが安心していられるクラスにしたい。多様性の時代で、いろいろな子がいるからこそ、お互いを尊重し合って、相手の意見を否定せずに受け入れて自分の意見も言える、相手のことを信頼して安心して過ごせるクラスにしたい。私自身も、笑顔で明るく接したいと思う。もし子供たちが他の子供を傷つけたり、危ないことしたりしたときは注意するべきだと思う。しかし、明るい雰囲気とは教師が作っていくものだと思うので、温かくて安心できるクラスにしたいと思う。

（参加者）私は一人一人が笑顔になれるクラスを作りたいと思う。笑顔になることによって、向上心も増えると思う。笑顔があふれて、楽しく過ごすことができればと考えている。

（参加者）私は、自分と周りを大切にできる学級を作りたいと思う。これからの社会で、人と協力することの大切さは変わらないと考えている。人と意見が違ったときに自分のことを責めるのではなく、自分と人を大切にできる学級を作りたいと思う。

○以上で、意見交換会を終了とする。

（教育長）最後の、「どんなクラスにしたいか。」と聞き、どの人からも、安心、信頼という言葉が出てきた。まさに教育は人だということを改めて感じた。皆さんがこのように考えていることは、我々としても頼もしいと感じたところである。教育や学校は、いろいろな変化が激しいところであり、それに対応している。先ほど、笑顔で明るくという意見もあった。教員の待遇や環境について、教育行政として整備していきたいと感じた。今日は率直に話していただき、こちらも勉強になった。皆さんの今後の御活躍を期待する。

○教員を目指そうと思ったきっかけについて

（参加者）中学生のとき、教員になりたいという夢を持った。きっかけは、周りからも尊敬されている先生に憧れ、中学校の体育教員を目指していたが、教育実習を通して、小学校教員を目指すようになった。

（参加者）小学校5年生のときの先生が、親身に相談にのってくれたり、先生という立場でも休み時間に一緒に遊んでくれたりと頼りになる存在であった。自分も「こんな先生になりたい。」と思い、小学校の教員を目指した。

（下鶴委員）良い出会いがあったことを嬉しく思う。

（参加者）中学校3年生のとき、学年主任で部活動顧問の先生に、「時間を守る」とか「ルールを守る」など、これからにつながる「生きる力」を教えてもらった。そのようなことを、子供たちに教えることができる中学校の教員に魅力を感じて、目指すようになった。

（参加者）小学校のときの先生の「小学校の先生って、子供たちと6年間を一緒に関わり合いながら、子供たちの成長を見守ることができて自分も成長できる。」という言葉がきっかけで、小学校の先生を目指すようになった。

（参加者）小学校6年生のときに出会った先生が、親身になって自分に関わってくれたことがきっかけで「人間性が素晴らしいな。」「こんなに人になりたい。」と思うようになり、小学校の先生を目指した。

（参加者）子供が好きで「子供と関わる仕事がしたい。」という希望と、私自身努力をすることが好きなので努力をすることの大切さや嬉しさなどを、子供たちに伝えたいという思いで、小学校の教員を目指した。

（参加者）中学校2・3年生のときの先生に憧れたので目指した。その先生との出会いのおかげで、大人や他の先生とも関わるできるようになった。私も子供たちから頼られるような身近な先生になりたいと思う。

（参加者）学校がすごく楽しく、大好きであり、将来、ここで働きたいという思いがあった。また長い間、水泳をしてきたこともあり、体育が好きになった。自分が今まで教わってきたことを、子供たちに教えたいと思い、教員として働いている。

（学校教育部長）実際に夢を叶えられて、理想と現実の違いはあるか。

（参加者）現在は、とても楽しく子供たちと接している。一緒に働いている先生方も良い方が多く、今も夢の通りに、仕事をさせてもらっている。

（参加者）ゼミのテーマになっている義務教育について話を聞きたいと思い参加した。LGBTQ をメインに取り扱う卒業論文を書きたい。自分の周りでも、そのようなことを意識し始めたのが、中学校のときであった。中学の修学旅行の部屋決めなどについて、聞きたいと思っている。

（黒柳委員）浜松の教員には、素敵な方が多いのだと改めて実感した。皆さんがそのような先生に出会えたことは、素晴らしいことだと思う。きっかけである「思い」を、大事にしてほしい。これから教員を目指す中で、苦しいこともたくさんあると思うが、その「思い」を忘れずに頑張っていたきたい。

（下鶴委員）一人一人の教員を目指そうと思ったきっかけを聞いたときに、やはり出会いは人生を変えるのだと感じた。私は教員であったが、将来の夢のきっかけが「この先生みたいになりたい。」と思って、先生を目指してくれたのなら、これほど嬉しいことはない。ぜひ皆さんも、そのような思いを抱かせるような教員を、目指して頑張ってもらいたい。浜松の未来が明るく感じられ、本当に嬉しい。ぜひ、頑張っていたきたい。

（神谷委員）教員という職業は、良い先生に出会った皆さんが教員になり、何十年後の学生が、また、良い先生に出会っていくということを繰り返していく素敵な職業なのだ改めて感じた。好きな先生も嫌いな先生も自分の人生に大きな影響を与えてくれることに変わりはない。「もう忘れていたのかな。」と思っても、皆さんのことを覚えている先生もたくさんいるのではないかなと思う。

○浜松の学校、または教育で思い出に残っていることについて

（参加者）佐鳴湖があり、そこで調べ学習の授業をした。浜松はいい意味で、都会的な場所と、田舎のように落ち着く場所が多くある。すごくバランスの取れた住みやすい場所だと思う。

（参加者）浜松市特有の行事で、小学校5年生の時に30分間回泳を行った。将来、小学校の先生になったらそのような場面で自分の力を出せたら良いと思う。

（神谷委員）浜松は、面積が広く、田舎もあれば都会もある。各学校がある程度、独自

にいろいろなことができるということが教育の特徴だと思う。

（下鶴委員）地域の特色とマッチした学習がしやすい。先ほどの発言者のように地域に佐鳴湖があったら「佐鳴湖学習」といった学習に取り組んでいく。そのようなところが浜松の特色だと思う。浜松市は広大な面積を持っていて、北は長野県に近い学校から、南は遠州灘に近い学校まである。それぞれの地域の特色を生かして教育活動を推進している。

#### ○浜松の教育における LGBTQ について

（参加者）LGBTQ のことについて聞きたい。修学旅行の私服とか、修学旅行の部屋割について申し出があった場合、どのようにしているのか。その年でカミングアウトをできる子も少ないと思うが、申し出があった場合に、体の性別に合わせるのか先生と同じ部屋に泊まるのか、どのような対応になっているのかを聞きたい。

（鈴木参事）事例としては、御家庭と話し合い、いろいろな条件を加味した上で、相談して決定する。時間をかけて話し合う。

（学校教育部長）自分でそのことを自覚でき、外に出して言えるようになるのは中学校ぐらいからだと思う。小学校だとそのようなことを表明する子供たちは少なく、学校の先生もどのように接していくのかという知識や経験が、まだ足りてない。研修を行い、学校の教職員に、知識を身につけるよう、これから本格的に動いていかなければいけない。現在は個別対応なので、その子が LGBTQ の子だとわかれば、きちんとした対応ができていますが、一部の人理解して対応していく形ではなく、学校全体でどのように接していくのが一番正しいのかということを理解していくことが理想である。関連して、制服については、基本的に自由選択になっている。女子生徒であってもパンツを選択する生徒もいれば、男子生徒でもスカートを選択している生徒もいる。ただ、浜松の子供たちがすごいと思うところは、子供たちの中で、何の違和感もなく受け入れられているところである。そしてその子も、全く違和感なく、学校生活を送れているという状況がある。

（参加者）実際にカミングアウトをした子供がいた。何気なく「そうなんだ。じゃあ一緒に対応を考えよう。」と言った言葉が嬉しかったようで、後日、御家庭に確認をした際に、本人が「すごく嬉しかった。」と言っていたことを聞いた。やはり子供も、カミングアウトするときは勇気がいるのだと感じた。私の住んでいる市では、来年から、市内統一の制服を作るということである。

（学校教育部長）制服は一種類に決めるのか。

(参加者) 各学校の制服はまだしばらくあるが、標準服として選択できるようになる。

(学校教育部長) 浜松も制服に関しては、「学校に着ていく服」という言い方に変えた。「学校に着ていく服」について現在、協議会を立ち上げて、昨年から議論を重ねている。標準服の話も論点としては挙がっている。

## ○授業における ICT の活用について

(参加者) 学校の授業における ICT の活用について皆さんの意見をお聞きしたい。学生の方は教育実習などで実際に活用された事例、現場の先生には、過去に実践された事例でよかったと思うことと、実際小学校ではどのような実践が行われているのか、その教科と具体的な方策や効果について伺いたい。

(鈴木参事) ICT を活用した授業を見る中で、子供たちが聞いているふりや、分かっているふりなどをする場面は、すごく減ってきていると感じる。授業に参加して、自分なりのペースで学習をしていると感じる。子供たちによる授業への参加する度合いが高まった。内容が分からないまま授業が進んでいくということが減ったと感じる。教員もそれを実感していると思う。今までは使い方に慣れることが大事だったが、現在は、活用方法にシフトしている。各学校で自主的な研修も行われている。ICT について全く分からなくても、すぐに追いつける環境があるので、そこは心配しなくてもよいと思う。

(参加者) 子供による授業への参加の度合いが高まったとあったが、授業のどのような様子を見て感じたのか。

(鈴木参事) ICT を活用した授業では、自分で聞いて、考えて、伝えている。タイピング作業などを通して、しっかり自分で考えているということが、はっきりわかる。小学校の低学年と中学生では違いがあるが、聞いた話を自分なりに咀嚼して考えている様子が見てとれる。

(下鶴委員) 子供たちは、タブレットなどの操作についても順応が速い。1年生でも上手に操作していて、私たちが思っている以上だと思う。一人一人が学んでいるのと同時に、それをもとに協働的な学びもできている。ICT が入って学習態度や教室の雰囲気が変わったのではないかなと思う。

(神谷委員) ICT については、利用する中でどちらが良いか試行錯誤をしている段階の教員が多い。活用の仕方に苦慮する教員もいる。始めたばかりで、良い面もあれば、改善する面も多々あるのだと思う。活用が進めば、一人一人に合った学習の提供ができるようになるのではないかな。分からないところは自分でもっと深く学習できたり、興

味がある部分はより意欲的に学習したりすることが理想である。まだ始まったばかりで、教員も子供たちも慣れようと頑張っている段階だと感じる。

（黒柳委員）ICT が導入されて、遊んでいる子や授業を聞いていない子がいなくなったように感じる。子供たちは初めてのことなので、興味を持って取り組む姿が見られる。

（参加者）マット運動の授業の際、前転と後転について、改善点を発見するために ICT を活用した。動画で撮影し、友達と互いに動きの確認を行い、練習してからもう 1 度撮影をする。撮影の前後を比べて、友達と確認し合った。自分の運動している姿を見ることができない中で、ICT を活用して客観的に自分の運動している姿を見ることができた点は、ICT 活用の利点だと感じた。

（参加者）小学校での ICT 活用について、タブレットを用いるときのルールを確立することが難しいという意見を聞いた。「おもしろい」「楽しい」が先行して制御できないところが、小学校の低学年には見受けられる。しかし、そこを制御できれば、便利で効果的に学ぶことができるという意見も伺うことができた。振り返りで、その日の授業の成果や課題がすぐにわかり、次の授業に生かすことができる点が ICT の良い点だと感じた。

（学校教育部長）ICT を使った授業の効果については、研究を行っている。ICT で学習をすることによって、子供たちの動静が落ち着いてくるということがある。それは教員が、肌感覚として感じていることではあるが、なぜそうなるのかはわかっていない。一つ言えることは、タブレットを使った学習の中では、論理的な思考を必要とする。論理的に思考をすると、衝動的な行動が減ってくるのではないかと考える。まだ、仮説ではあるが、ICT とどのような関わりがあるのかという研究を、今年から少しずつ始めている。このことは、いじめの対応にも応用される。いじめを抑えるために、ICT 教育を行うことで、子供たちが落ちつき、いじめの件数が減っていくことになるということが実証されれば画期的な話になると思う。

## ○発達支援教育について

（参加者）情緒学級などの有無について、学校によって差があるはなぜなのか。

（学校教育部長）現在、浜松の公立の学校に関しては、中学校区を一つのグループとして、その中に知的学級と自閉・情緒学級を必ず設置していけるように進めている。教員の確保や教室の整備などの課題はあるが、来年度も必要な数の発達支援学級をきちんと整備していけるよう動いている。ただ、整備の面だけではなく子供たちの目線でも考えなければならない。

## ○問題を抱えるクラスへの支援について

（参加者）問題を抱えるクラスへの支援について、支援員以外に支援の方法はないか。

（鈴木参事）基本的には、学校から教育委員会に相談があり、実態を把握した上で、支援員を派遣していく。人的な問題等もあるため、その際は、学校内でやり繰りして、人数を増やして支援していく。

（神谷委員）学校によって対応に違いはあるが、保護者に声をかけて、学校に来てもらい対処していくという事例もある。

（下鶴委員）学習ボランティアなど、地域の方に学校へ来ていただくことも可能である。

（黒柳委員）「コミュニティ・スクール」などを通して、保護者に学習ボランティアを頼んだり、学校に足を運んでもらったりと、いろいろな方の手を借りることが可能になりつつある。

## ○以上で、意見交換会を終了とする。

（黒柳委員）教員を目指すきっかけを聞いて、夢や希望を持って教員を目指していただけているのだと改めて感じた。現在、他県では教員採用の志願率が下がっている中で、浜松は志願率が上がっている。浜松の教員は情熱がある方が多く、一生懸命取り組んでくれている。若手の教員も多くなっている。きっと皆さんと共に頑張ってくれと思う。教員は、子供の育成に関わる素晴らしい仕事であると同時に自分自身も大きく成長できる職業だと思う。ぜひこれからも頑張って浜松の教員を目指していただきたい。